

イタリア学会
第 72 回大会 プログラム

2024 年 11 月 2 日 (土)

東京大学
(本郷キャンパス)

会場 東京大学 本郷キャンパス
法文2号館 教員談話室

◆ 開催校挨拶 9:45 ~ 10:00

◆ 研究発表

10:00-10:30

1. 1920年代における地方主義ファシストの文化活動
——雑誌『イル・セルヴァッジョ』とストラパエーゼ
発表者：小檜山明恵（東京大学） 司会：太田岳人（千葉大学）

◆ 休憩 10:30 ~ 10:35

10:35-11:05

2. アルバ・デ・セスペデスの『前と後』における戦後知識人の表象
発表者：古川 望（東京外国語大学）
司会：山崎 彩（東京大学）

◆ 休憩 11:05 ~ 11:10

11:10-11:40

3. ダンテにおける *povertà* ——『神曲』と『帝政論』の比較から考える
発表者：渡辺元裕（東京大学） 司会：星野 倫

◆ 休憩 11:40 ~ 11:45

11:45-12:15

4. *Comunicare la cultura — Sfida e iniziative degli archivi italiani che si diffondono nel mondo digitale tramite i social media —*
発表者：遠藤菜摘（株式会社キャンパスクリエイト）
司会：湯上 良（昭和女子大学）

◆ 休憩 12:30 ~ 13:30（評議会：別室にて）

◆ 総会 13:30 ~ 14:30

◆ 特別企画 14:30 ～ 17:30

国際シンポジウム「ルネサンス期のイタリア詩——芸術と科学」

Simposio internazionale “La poesia italiana del Rinascimento, fra arti e scienze”

使用言語：イタリア語（通訳なし）

— MERISALO, Outi (Università di Jyväskylä)

“Testo e immagine nei manoscritti rinascimentali: i viaggi di Niccolò Conti di Chioggia e il Portolano 1 della Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze”

— VENTURA, Iolanda (Università di Bologna)

“Fisica e poesia nel Rinascimento italiano: qualche esperimento di traduzione di Lucrezio”

— MIZUNO, Ruki (Università delle Arti di Aichi)

“Drammatizzazione e metamorfosi della *Gerusalemme liberata* negli spettacoli teatrali dall’epoca barocca a oggi”

— AMATO, Lorenzo (Università di Tokyo)

“I giardini in poesia nella poesia fiorentina del tardo Rinascimento”

◆ 閉会の挨拶 17:30

◆ 懇親会 18:00 ～ 20:00

会場：メトロ（法文2号館地下）

1920 年代における地方主義ファシストの文化活動 ——雑誌『イル・セルヴァッジョ』とストラパエーゼ

小檜山明恵（東京大学）

ファシズムが権力を掌握した 1920 年代、ファシスト知識人・文学者による「ストラパエーゼ」、「ストラチッタ」と呼ばれる文化運動があったことは比較的良好に知られている。しかしながら、その実態については、先行研究の数も少なく、研究者の間でも詳細が共有されているとは言い難い。本発表では、この時代のファシスト文化人、とりわけ地方主義（あるいはストラパエーゼ）の立場から言論活動を行なった者たちに焦点を当て、1920 年前後の政治・社会的コンテクストを確認しながら、彼らが行った文化的試みやその思想を明らかにする。

具体的には、1924 年にトスカーナ州コッレ・ヴァル・デルサで創刊された『イル・セルヴァッジョ』を取り上げる。地元のファシストたちが立ち上げたこの小雑誌は、実に 19 年にわたって刊行を続けるが、その間、編集・出版の拠点を転々と変えながらも、地方主義の見地から政治評論や風刺文、絵画を発信していった。刊行初期においては、ファシズム運動においてスクワドリズモ（小集団による暴力的な示威行動）を推進した非妥協派ファシストの立場から、政治的中央に対するアピールを行うことに注力したが、ファシズムの「正常化」を求める政権中枢との距離が開くにしたがって、文化分野での活動を活発化させていく。

ここにおいて重要な役割を果たすのが、雑誌を主宰したミーノ・マッカーリはじめ、アルデンゴ・ソッフィチ、ロマーノ・ビレンキらトスカーナ地方出身の文筆家たち、さらには、オットーネ・ロザイ、ジョルジョ・モランディ、フィリッポ・デ・ピシスといった、20 世紀の芸術史に名を残す画家たちであった。作家と画家のコラボレーション、あるいは、文学・美術といった手法の垣根にとらわれない多彩/多才な表現者たちを通して、『イル・セルヴァッジョ』は、イタリアの農村風景、食や信仰に基づく地域の伝統的な暮らし、土地に結びついて働く労働者といった「パエーゼ」のあり方にまなざしを注ぐ。そうして、国家統一以降、近代化を一心に推し進めてきたイタリア社会が顧みることのなかった、古き文化の価値を訴える。

一方、1920 年代の文化シーンは、モダニズムの流行一色に染まっていた。ヨー

ロッパの近代的大都市を中心に発生した諸芸術ジャンルにおける潮流は、人的・経済的交流によってイタリアにももたらされる。文芸の分野においても、マッシモ・ボンテンペッリが雑誌『ノヴェチェント』をフランス語で発刊し、イタリア内外の先駆的な作家たちを執筆陣に迎えた紙面を作って、大都市文化に支えられた実験的な試みを始動させた。

インターナショナルで華やかな知的洗練を見せつけたボンテンペッリの活動に対し、『イル・セルヴァッジョ』は、「ストラパエーゼ」と「ストラチッタ」の対立の構図を描き出して論陣を張り、イタリア文化に背を向けてヨーロッパ趣味に耽るブルジョワとしてストラチッタ派の都市主義者たちを糾弾する。批判の急先鋒となったのがクルツィオ・マラパルテだが、実のところ、彼自身がヨーロッパとイタリア、modernità と antichità の間で揺れ動き続けた人物であった。

マラパルテの仕掛けたストラパエーゼ/ストラチッタの論争が長続きすることはなかったが、伝統的なイタリアが近代的都市文化にいかに対峙するかというテーマは、ミーノ・マッカーリにとっても主要な問題意識であり続けた。1930年代の『イル・セルヴァッジョ』誌上には、ファシズム政府による都市開発や近代建築による景観の変化をめぐって多くの論考が掲載されることになる。

アルバ・デ・セスペデスの『前と後』における 戦後知識人の表象

古川 望（東京外国語大学）

アルバ・デ・セスペデス（1911-1997）は、ローマ出身のキューバ系イタリア人作家である。反ファシズムの立場を取っていたため、1943年9月にローマでナチスによる占領が始まると、アブルッツォ州の森に隠れた。11月にアブルッツォ州を離れ、連合軍によって既に解放されていたバーリに到着した。そして、1943年12月から1944年6月にかけて、まずラジオ・バーリで、その後ラジオ・ナポリでラジオ番組『イタリア・コンバッテ』を通じてレジスタンス活動に携わった。この番組はさまざまなコーナーで構成されたが、中でもデ・セスペデスが担当した「クロリンダの声」は、大きな成功を収めたコーナーのひとつであった。デ・セスペデスはタッソの『エルサレム解放』に登場する女戦士クロリンダの名前を用いて人々に語りかけた。ラジオを通じて、リスナーと親密な関係を築き、自身の経験や考えを共有することで、戦争の問題を個人的なものとして捉えさせようとした。特にイタリアの女性たちに向けてのメッセージを発信した。彼女たちの身近な友人のように呼びかけ続け、男性のように直接戦闘に参加しなくても、少し意識を変えることで、ファシズムやナチズムと戦うことができるのだと訴えた。デ・セスペデスは、イタリアの女性たちが自らの意識を高め、一人一人が自立した人間として主体的に行動することを望んでいた。また、雑誌『メルクーリオ——政治・芸術・科学についての月刊誌』（1944-1948）の創刊と編集を行い、反ファシズム知識人として、イタリアの文化革新に貢献した。

デ・セスペデスは、『前と後』（1955）を通して、そうした反ファシズム活動に従事していた時期や戦後の経験について振り返っている。主人公イレーネは35歳の女性で、ローマ市内の質素なアパートで一人暮らしをしている。イレーネもデ・セスペデスと同様、第二次世界大戦中にレジスタンスに携わり、南イタリアに逃亡した。レジスタンスの経験後、ローマに戻るとイレーネは、ジャーナリストとして自活することを決意する。イレーネは、それまで自分が属していた伝統的な価値観を重んじるブルジョワジー世界と決別し、社会的出自によって保証された特権を放棄することを選んだ。ところが、戦後、使用人の女性との関わりを

通し、それまでの自分を突き動かしていた信念が揺らぐのを感じる。使用人のエルミニアは突如イレーネのもとを離れ、前の女主人のもとに戻る決断を下した。イレーネは彼女を一個人として尊重していたが、階級差に起因する、エルミニアの教養の欠如による溝が両者の間には存在していた。イレーネは教育を通じてその溝を埋めようと試みたが、エルミニアは前の女主人の横暴な態度に慣れきっていたため、イレーネの思いやりのある態度を受け入れることができなかった。人間としての尊厳のある生き方をエルミニアができるようにイレーネは努めたが、エルミニアは自ら従属的な役割を受け入れることを選んだのである。この出来事を受けてイレーネは、戦後社会における知識人の役割を自らに問い直していく。また、知識人であるがゆえに感じる周囲の世界からの疎外感について考え始める。デ・セスペデスは、『前と後』で主人公イレーネの知識人としての価値観と、物質主義的で伝統主義的な社会の価値観を対比させている。

本発表では、デ・セスペデスのレジスタンス経験を踏まえながら、戦後知識人イレーネの描写を中心に作品分析を行い、レジスタンス経験と戦後社会に対する作家の考え方を分析する。女性文学の系譜に新たな視点から光を当てるとともに、イタリアのレジスタンス期と戦後における女性特有のアイデンティティやジェンダー規範に関わる問題を浮かび上がらせる。

ダンテにおける *povertà*——『神曲』と『帝政論』の比較から考える

渡辺元裕（東京大学）

本発表は、ダンテが *povertà*、とりわけ *povertà apostolica*（使徒的清貧）に対する論争についてどのように考え、著作に記しているのか検討する。それが理解できる論点を『神曲』及び『帝政論』のテキストに基づき提示し、2つの作品で実際に展開される主張の違いに注目する。この違いがダンテの思想全体の中で有する意味を、ダンテのテキストと関連する教皇令や神学的議論も考慮に入れつつ明らかにする事が発表者の狙いである。

ダンテは『神曲』「天国篇」第11歌でアッシジのフランチェスコの生涯についてトマス・アキナスの口を通し語らせ、フランチェスコが示したキリストに倣う *povertà* を称賛すると同時に、「天国篇」第12歌ではボナヴェントゥーラの口を通し創設者による *povertà* の実践から逸脱していたフランチェスコ会の現状を厳しく批判する。しかし『神曲』のボナヴェントゥーラは *Conventuali*（修院派）とより厳格な貧しさを追及した *Spirituali*（聖霊派）の双方を批判している事からも分かるように、フランチェスコ会内部に深刻な対立を引き起こし、多くの異端者を生み出した *povertà* の解釈とそこから派生した世俗における教会の所有権を巡る議論について、ダンテ自身が特定の立場を取り、自らの考えを明確に示しているわけではない。

フランチェスコの死後、彼の理念の現実的な継承実践を後押しする観点から、所有権を放棄して生きるために“*simplex usus facti*”と呼ばれる概念を含む教皇令 *Exiit qui seminat* がニコラウス3世により発せられるが、ダンテは『神曲』でこの教皇令と関連した部分は一切評価の対象とせずニコラウス3世を地獄に落としている。

この教皇令は教会の所有権の存在を前提としており、『神曲』のダンテは理念としての *povertà* が教会から失われた原点をコンスタンティヌス帝による西ローマ帝国の寄進伝説に求め、寄進の結果生じたことを批判的に評価する。しかし寄進の効力そのものは明示的に否定せず、結果的に教皇庁が所有権を有することを否定してはいない。

他方『帝政論』でダンテは、この問題について『神曲』より踏み込んだ見解を

示す。キリストと使徒達が金銭を有していたか否かについての議論からコンスタンティヌス帝による寄進の効力を無効と見做す事で、教皇庁の世俗における所有権を明示的に否定する。ボナヴェントゥーラが *Apologia pauperum contra calumniatorem* で行う議論や、ドメニコ会士グイード・ヴェルナーニによるダンテ批判 *De Reprobatione Monarchiae* を参照する事で、『帝政論』でのラディカルな見解は、皇帝と教皇庁の世俗における支配権を巡る争いと密接に関係していた事が理解できる。『帝政論』でもダンテはコンスタンティヌス帝による寄進を *povertà apostolica* が蔑ろにされた根源と考えるが、この寄進を問題と見做さなかったボナヴェントゥーラの考えとはこの点で大きく異なっていた。

またカール大帝は、その寄進が伝説であるコンスタンティヌス帝とは異なり、実際に 774 年教皇ハドリアヌス 1 世に対し教皇領を寄進した人物であるため、ダンテの思想における *povertà apostolica* と教皇庁の関係を考える上では別途カール大帝への評価も検証する必要がある。ダンテは『神曲』『帝政論』共にカール大帝の教皇領の寄進者としての側面を批判していない。このダンテによるカール大帝への評価は、ボナヴェントゥーラが *Collationes in Hexameron* で行ったカール大帝への評価と類似しており、こうしたカール大帝への評価を巡る両者の思考に見られる類似性は、コンスタンティヌス帝の寄進に関する評価の違いと比較するならば対照的なものであると言える。

本発表の最後にこのようなダンテのコンスタンティヌス帝とカール大帝の寄進への評価の違いが、『神曲』と『帝政論』で *povertà apostolica* に関する議論の踏み込み方が異なる理由を説明する重要な要素である事が示されるであろう。

Comunicare la cultura — Sfida e iniziative degli archivi italiani che si diffondono nel mondo digitale tramite i social media —

遠藤菜摘（株式会社キャンパスクリエイト）

Gli archivi non sono semplici depositi di documenti, ma sono luoghi di memoria e di identità. In Italia, gli archivi sono stati un punto di riferimento storico-culturale e hanno svolto un ruolo fondamentale nella costruzione del senso di appartenenza a una comunità. Oggi, grazie ai social media, che permettono una diffusione immediata e capillare dei contenuti, gli archivi possono raggiungere un pubblico più ampio, superando qualsiasi barriera geografica e favorendo anche l'interazione e la condivisione. Diventano così luoghi di co-creazione che promuovono la partecipazione attiva del pubblico alla costruzione della storia. L'obiettivo di questo studio, dunque, è quello di comprendere l'attuale rapporto tra archivi e social media, sviluppando metodi per utilizzare questi strumenti di comunicazione in modo efficace nella pratica quotidiana degli archivi.

Le potenzialità di sfruttare i social media da parte degli archivi sono assai ampie. Tuttavia, si possono comunque individuare alcuni funzionamenti fondamentali che favoriscono la presenza degli archivi sempre più attivi sulle reti: 1) Ampliare il pubblico: raggiungendo nuovi utenti, soprattutto utenti giovani e stranieri che possono avere difficoltà ad interagire con la storia; 2) Valorizzare il patrimonio: rendendo accessibili e fruibili documenti storici attraverso digitalizzazione, condivisione ed eventuale pubblicazione online; 3) Promuovere la cultura: organizzando eventi online, creando comunità di appassionati e favorendo il dibattito pubblico; 4) Collaborare con altri istituti: condividendo risorse per valorizzare il patrimonio culturale a livello nazionale e internazionale, gli archivi creano una rete. In questo contesto, l'archivio diventa un vero e proprio mediatore culturale, assumendo un ruolo sempre più sociale, in grado di utilizzare le nuove tecnologie per rendere la storia viva e attuale.

Per questa ricerca, sono stati coinvolti tre archivi di rilievo, sia statali che privati: l'Archivio di Stato di Firenze; l'Archivio di Stato di Napoli; l'Archivio Storico SDF di Bergamo.

Attraverso questionari, interviste e tirocini, lo studio ha analizzato alcune particolari modalità di utilizzo dei social media da parte degli archivi. Nonostante la natura diversa tra gli istituti, i risultati mostrano una crescente diffusione di piattaforme come Facebook, Instagram e

YouTube con obiettivi chiari nel loro utilizzo: 1) Divulgazione: condividere documenti, immagini e video accompagnati da spiegazioni e commenti da parte degli archivisti e/o di specialisti; 2) Comunicazione: interagire con il pubblico, rispondere a domande e creare una porta virtuale all'archivio, pubblicando informazioni sulla storia e sulle attività dell'archivio; 3) Valorizzazione: valorizzare il patrimonio archivistico, trasmettendo anche l'immagine di un archivio impegnato nel raccontarsi. Sia nella divulgazione che nella comunicazione si osserva un maggiore utilizzo di Facebook e YouTube, mentre per quanto riguarda la valorizzazione si utilizza spesso Instagram.

Inoltre, gli studi approfonditi durante il tirocinio #storiesulparallelo presso l'Archivio di Stato di Napoli, il cui obiettivo è stato quello di connettere le culture italiana e giapponese attraverso i social media, hanno dimostrato l'importanza di sviluppare un piano strategico per l'uso dei social media, diversificando i canali e adattando il tono di voce in base al pubblico. Attraverso un ampio lavoro di analisi dei canali istituzionali, ricerca di contenuti e creazione di post, sono emersi alcuni suggerimenti per una comunicazione più efficace sui social media: 1) Personalizzazione del pubblico: adattare il linguaggio e i contenuti alle specificità culturali del pubblico di riferimento; 2) Diversificazione: utilizzare diversi canali per raggiungere pubblici diversi con obiettivi specifici; 3) Innovazione: sperimentare nuove forme di comunicazione visiva e testuale per rendere i contenuti più accattivanti.

I risultati di questa ricerca sottolineano l'importanza di un approccio collaborativo e multidisciplinare nella valorizzazione del patrimonio archivistico. Si auspica che questi risultati possano stimolare ulteriori approfondimenti, promuovendo una maggiore apertura e inclusione.

国際シンポジウム ルネサンス期のイタリア詩——芸術と科学

詩はルネサンスの知的体系において中心的位置を占める。古典古代の再発見や評価が特徴的な時代にあつて、詩は、知識人たちに対し、複雑な概念の探求・表現・拡散を可能とする媒体であつたのだ。哲学・科学・芸術概念を、優雅で説得的な方法で、簡潔に伝達できる。

古代の偉大な作家たちの著作との絶え間なき対話につとめたルネサンス期の詩人たちは、古典を翻訳しつつ、当時の文化的・歴史的な文脈へと適合させていった。詩を通して、世界の美しさや調和だけでなく、最新の科学的発見や技術的革新も称賛する。こうして詩は、人文主義的理念の普及のための特有の伝達手段となり、ルネサンス期における思想や文化を形作るのに貢献した。

以上の文脈をうけ、今回のシンポジウムでは、詩が知識や創造性に関する新たな表現形式の誕生のための豊かな土壌を生み出しながら、いかにして科学や芸術と相互作用をなしたのかがあきらかにされる。具体的事例を分析し、特定の議論を通して、さまざまな動きや、当時の知的産物に与えた影響力が探求されよう。使用言語はイタリア語、通訳はなしの開催である。

予定発表者

—「ルネサンス期写本の文章とイメージ——キオッジャのニッコロ・デ・コンティの旅とフィレンツェ国立中央図書館所蔵の世界地図 Portolano 1」

オウティ・メリザーロ（ユヴァスキュラ大学、フィンランド）

—「イタリア・ルネサンスにおける物理学と詩——ルクレティウスを翻訳する試み」
ヨランダ・ヴェントゥーラ（ボローニャ大学）

—「舞台で表現された『解放されたエルサレム』の世界、バロック期の音楽劇から現代の学生による芝居まで」

水野留規（愛知県立芸術大学）

—「ルネサンス後期フィレンツェの詩における詩的庭園」

ロレンツォ・アマート（東京大学）

Simposio internazionale

La poesia italiana del Rinascimento, fra arti e scienze

La poesia occupa una posizione centrale nel sistema intellettuale del Rinascimento. In un'epoca caratterizzata da una riscoperta e valorizzazione dell'antichità classica, la poesia era anche un mezzo attraverso il quale gli intellettuali potevano esplorare, esprimere e diffondere idee complesse. La sua importanza risiedeva nella capacità di sintetizzare e comunicare in modo elegante e persuasivo concetti filosofici, scientifici e artistici.

I poeti rinascimentali si impegnarono in un dialogo costante con le opere dei grandi autori classici, traducendole e adattandole al loro contesto storico e culturale. Attraverso la poesia, essi non solo celebravano la bellezza e l'armonia del mondo, ma anche le scoperte scientifiche e le innovazioni tecnologiche dell'epoca. La poesia divenne un veicolo privilegiato per la diffusione delle idee umanistiche, contribuendo a plasmare il pensiero e la cultura del Rinascimento.

In questo contesto, il nostro simposio intende mettere in luce come la poesia interagisse con la scienza e le arti, creando un terreno fertile per la nascita di nuove forme di conoscenza e creatività. Attraverso un'analisi di casi specifici e una serie di interventi mirati, esploreremo le dinamiche di questa interazione e il suo impatto sulla produzione intellettuale dell'epoca.

Interventi:

— MERISALO, Outi (Università di Jyväskylä)

“Testo e immagine nei manoscritti rinascimentali: i viaggi di Niccolò Conti di Chioggia e il Portolano 1 della Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze”

— VENTURA, Iolanda (Università di Bologna)

“Fisica e poesia nel Rinascimento italiano: qualche esperimento di traduzione di Lucrezio”

— MIZUNO, Ruki (Università delle Arti di Aichi)

“Drammatizzazione e metamorfosi della *Gerusalemme liberata* negli spettacoli teatrali dall'epoca barocca a oggi”

— AMATO, Lorenzo (Università di Tokyo)

“I giardini in poesia nella poesia fiorentina del tardo Rinascimento”

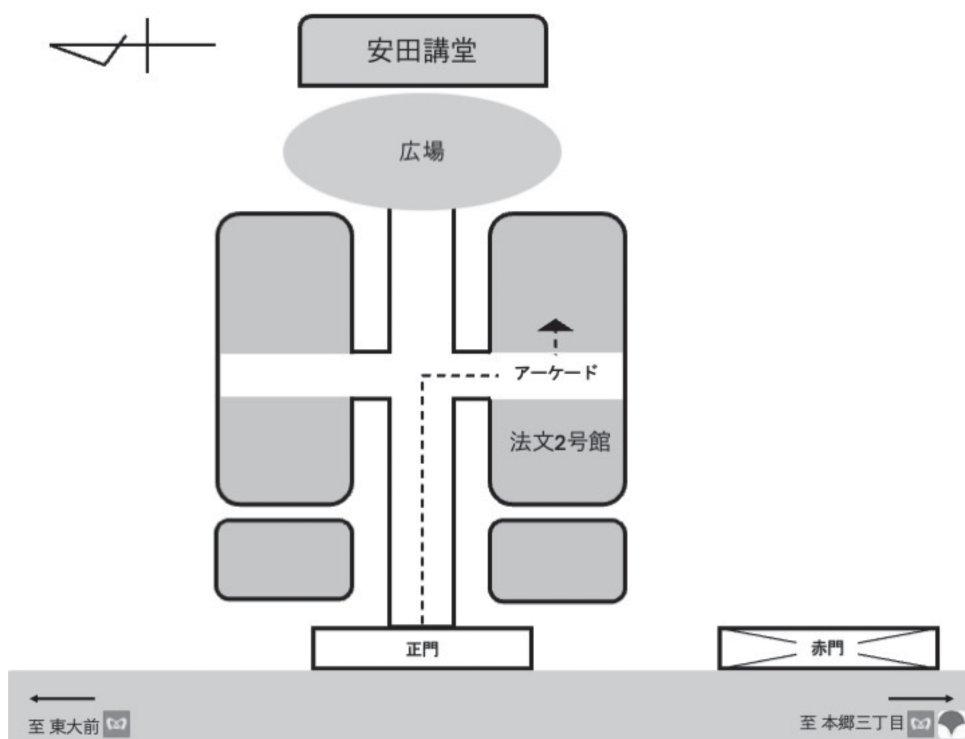
大会会場

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3

東京大学 本郷キャンパス 法文2号館「教員談話室」

控室

法文2号館「第3会議室」



* 赤門は閉鎖中のため、正門からお入りください。

* 「教員談話室」が見つからない場合は、Tel 090-7727-5490（運営スタッフ）まで問合せください。

アクセス

電車：地下鉄 丸の内線・大江戸線「本郷三丁目」駅より徒歩10分

地下鉄 南北線「東大前」駅より徒歩10分

◆Google マップ →



昼 食

大会当日、安田講堂下の学食は営業しています。その他、キャンパス正面の本郷通り沿いのお店やコンビニをご利用いただけます。

懇親会のご案内

日時：大会当日 18 時から 20 時まで

会場：メトロ（法文 2 号館地下）

会費：¥4,000（学生 2,000 円）

同封の振込用紙で 10 月 4 日までにお払込ください。

お払込後のキャンセルはご遠慮願います。

*お支払いいただいていた懇親会費に余剰金が出た場合は、これを学会への寄付として扱わせていただいたうえで会計報告に明記いたします。

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 603-8555 京都市北区上賀茂本山
京都産業大学 第2 研究室棟 542 内田研究室

E-mail: studiitalici@gmail.com

URL: <http://studiit.jp/>